

潮間帯を用いたマガキ天然採苗技術の現地実証

水産研究部 北部水産グループ

1. 研究の背景

近年、県内各地でシングルシード種苗を用いたマガキ養殖の取組みが始まっており、現場からは種苗の低コスト化や多様化が求められている。そこで、国の研究機関等で開発された「潮間帯を用いた地場天然採苗技術」の現地実証試験を実施し、県内海域における当技術の有用性を検討した。

2. 研究成果の内容・普及のポイント

1) 潮間帯における天然採苗試験

杵築市灘手漁港、中津市小祝漁港の2地区にケアシェル・クペル・ペットボトルを基質とした採苗器(写真1)を設置し、天然採苗を実施した。

ケアシェルへの平均付着数は32～676個体/基、クペルへの平均付着数は77～85個体/枚(0.24～0.27個体/cm²)、ペットボトル採苗器への平均付着数は139～1643個体/基(0.01～0.08個体/cm²)であった。全ての地区と基質でマガキの付着稚貝が得られ、当技術が県内海域でも有用であることが明らかとなった。

また、採苗時期や適地に関するデータの蓄積により、試験海域における天然採苗は、7～8月に港口部などの波当たりが比較的強い海域の潮間帯上部(岸壁のカキ密生帯から下約10～60cm付近が目安)で行うのが最も効率的であるということが明らかとなった。



写真1. 天然採苗試験に用いた採苗器

2) 地場天然種苗の養殖試験

天然採苗試験で得られた稚貝を用いて養殖試験(豊後高田市高田港)を実施し、稚貝の成長を追跡した。

試験を開始した8月上旬には平均殻高25.2 mm・平均殻付き重量1.5gであった種苗は、同年10月下旬には63.3 mm・25.4 g、翌年2月下旬には69.3 mm・49.9 gまで成長し、出荷サイズの目安である50 gを上回る個体が4割ほど確認された(写真2)。

以上のことから、天然採苗で得られたシングルシードの地場種苗も、養殖生産に利用できることが明らかとなった。

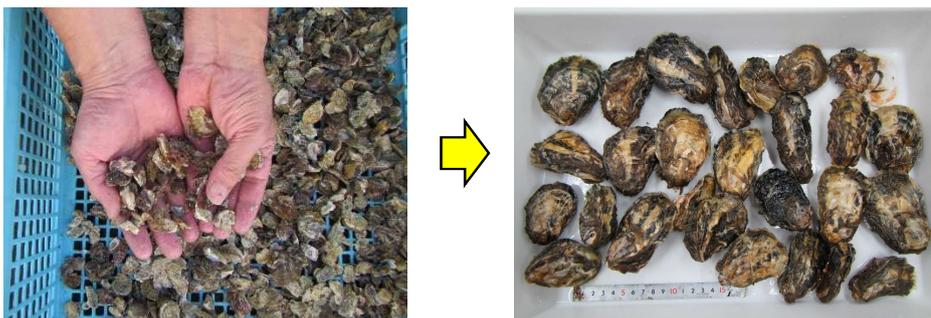


写真2. 養殖試験に用いた天然種苗の成長(左: 2020年7月31日撮影 右: 2021年2月22日撮影)

3. 期待される効果

手軽で安価な地場種苗を用いたシングルシード種苗の普及拡大により、種苗確保の省力化・低コスト化が実現される。

4. 担当機関連絡先

北部水産グループ 資源増殖チーム

TEL: 0978-22-2405

住所: 豊後高田市呉崎3386番地